

## 「聖書」

主任司祭 晴佐久昌英

先日、東京のホテルニューオータニで、日本聖書協会が主催する「国際聖書フォーラム」が開催され、国内外の二十人余りの講師による各講座に、延べ二千人近い人が参加した。ぼくも一講師として参加し、その熱気を肌で感じることができたし、聖書が単なる本ではなく、いまなお聖霊が働く生きた現場、まさにフォーラムであることを体験できて幸せだった。

講演のタイトルは「聖書は、宣言する。 解説ではなく宣言する教会」とし、講演要旨として、プログラムに次のように載せた。

<神は、人間に宣言する。

「わたしは、あなたを、愛している」と。

この宣言をいつでもどこでもだれにでもするために、神は人としてこの世に生まれ、苦しむ一人ひとりの人間に直接触れ、一人ひとりの救いを直接宣言した。すなわち、イエス・キリストとは、神の宣言そのものなのである。

「この聖書のことばは、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」

(ルカ4・21)

そのイエスの宣言を今日語る聖書もまた、神の宣言そのものである。

およそすべての神学・聖書学は、この宣言を「いまここで」実現させる学であり、およそすべての説教・宣教は、この宣言を「いまここで」共有する奉仕でなければならない。

聖書という、神の宣言に直接触れる感動を共にしたい。>

聖書は生きている。それは生ける神の、人を生かすいのちのことばである。目の前に聖書があるということは、神はわたしを愛しているということであり、その聖書をわたしが読むとき、わたしは神に愛されている。

この世に現にそんな書物が存在し、自分が現にそれを読んでいることを、もっと新鮮に受け止めてほしいという思いで講演したところ、幸い多くの人共感してくれて、会場全体に聖霊が働くのを感じることができた。そうしてイエスの口となって福音を宣言しているとき、一瞬、「使徒言行録」の一節を体験しているような感動さえあった。しかし、それは別に不思議なことではない。聖書とは、そのような本である。